ひんしゅく系動画配信者ジェイクの
突撃心霊廃墟　サンプル

著者：金目

登場人物

ジェイク
24 歳。自称有名動画配信者にして先鋭的アーティスト。本名は井上富男（いのうえ　とみお）。
通常時 12.7 センチ、勃起時 26.6 センチの巨根の持ち主。

多井中（たいなか）
ＤＣ。
動画配信者に憧れて、ジェイクの心霊廃墟突撃に同行する。

佐治木（さじき）
ＤＣ。
ジェイクに誘われてアルバイト感覚で心霊廃墟突撃に同行する。

冥堂観月（みょうどう　かんげつ）
カルト教団の教祖。故人。
教団施設廃墟に撮影にやってきた多井中に憑りつき、ジェイクを辱める。

【お願い】
この小説は金目によるフィクションであり、現実に存在する個人・団体などとは無関係です。
無断転載・私的利用の範囲を超えた共有など、著作権法に触れる行為は控えていただきますようお願いします。
この作品は犯罪行為を推奨するものではありません。フィクションとして、お楽しみください。
作中の性行為描写はすべてファンタジーとなります。現実のセックスへの参考になさらないようお願いします。

第一話

「なんか、嫌な予感がしますね」
「お、何々？
　第六感が働いたかな」
　不安そうに身を震わせるＤＣの多井中（たいなか）に、ジェイクはハンディカメラを向けながら話しかけた。
「なんか、見られている気がしませんか？」
　多井中はあどけない顔に不安を滲ませ、周囲を見回している。
「そうか。
　ここで集団自殺があったって聞いているからそういう気がするだけじゃないの？」
　もう一人の同行者であるＤＣの佐治木（さじき）が暢気そうな顔で笑っている。
　彼らの様子を撮影しているジェイクとしても、佐治木の言い分に共感している。
　ここは、冥堂観月（みょうどう　かんげつ）という男が設立したカルド教団の本部であり、そして、十三年前に集団自殺をして以来、誰も住んでいないという因縁の建物なのだ。
　集団自殺が行われた建物などを利用したいという物好きはおらず、現在の管理者であるカルト教団の被害者救済団体も更地にするだけの資金力がないため、建物を残さざるを得ないという負の遺産と呼ぶのに相応しい建物だ。
　内装は病院のように温かみのあるピンク色をしていることが、ジェイクの手持ちのライトに照らされた壁から明らかなのだが、集団自殺を行ったカルト教団の現場だと考えると肉体の内部にも見える。
　思いついてから、ジェイクはメモを取り出して「教祖の腹の内から見た月」と書き記し、窓から夜空に浮かぶ満月を撮影した。
　ジェイクは印象を大事にしている。
　刺激的な言葉を重ねることで視聴者を集めることを得意としているのだ。
　そんなジェイクは社会的には無職だ。
　動画配信でそれなりに収入があるのだが、生活費は女たちの稼ぎを当てにしているので、ジェイクの自意識はともかく、一般的には無職という表現が相応しい。
　ジェイク自身は先鋭的アーティストと自認しているのだが、一般的なアーティスト像から離れていることは、カルト教団の廃墟に深夜にＤＣ二人を連れて侵入していることからも明らかだ。
　ジェイク自身は先鋭的なアーティストを自認しているが、彼の動画はいわゆる「ひんしゅく系」というものだ。
　「無点灯で深夜の道路を走ってみた」「社会の窓が開いていますよ運動」「国立公園で野外放尿してみた」などなど、不謹慎な行為を他人にやらせている動画を投稿してはそれなりの視聴者を集めている。
　そんなジェイクの新作動画が、「ジェイクの突撃心霊廃墟」。
　動画配信者に憧れている多井中とその友人である佐治木による心霊廃墟でのリアクション芸を期待してのものだ。
　だが……

ジェイクは心の中で舌打ちをした。
「深夜にここの警備をしたがる人間がいないため、夜は施錠された上で放置されている」「集団自殺者の霊の声がする」「教祖である冥堂観月は死にきれずに彷徨っている」などなどと心霊廃墟スレッドでも噂が多い割に内部に侵入した撮影者がいない、いわば穴場スポットだというのに、それらしい事件が起きないのだ。
ジェイクとしては、多井中が怯えて失禁するような出来事を期待していたのだが、そういうこともない。
進入禁止の柵を乗り越え、入り口のドアのガラスを割って侵入し、一階から部屋を回っているというのに何もないのだ。
心霊廃墟スレッドでさえ、内部写真を撮影することを躊躇う本物の廃墟ならば、それらしいことが起こってもらわないと困る。
多井中と佐治木に前払いで支払った3000円だってただではないのだ。
せめて、3000円相当の不幸がこの二人に起きて貰わないと困る。
まあ、優秀なアーティストは第二第三の手も考えている。
ジェイクはにやりと笑った。
このまま何事もなく五階にある集団自殺の現場である祈りの間まで到着したのならば、二番煎じにはなるが、「度胸試し！　深夜の心霊廃墟で放尿してみた」と銘打って多井中と佐治木に放尿でもさせればいいだろう。
ジェイクがプロデュースした野外放尿動画はそこそこの評判であった。
他人が大事にしているものを粗末に扱うことに興奮する性癖の人間が一定数存在するからだろう。
「ほらほら、目的地まで頑張るぞ」
ジェイクは多井中と佐治木を急き立て、最終目的地である五階の祈りの間まで歩き始めた。

「え？　これ、仕込みですよね」
祈りの間の光景を目にした佐治木が、不安そうな顔でジェイクに振り返った。
最初からこの廃墟に怯えていた様子の多井中に至っては、何も言えずに歯をカチカチと打ち鳴らしている。
ジェイクも予想外の光景に息が詰まりそうになった。
ジェイクはこの場所が集団自殺の現場だと知ってはいたが、どのような方法で集団自殺が行われたのか知らなかった。
天窓の下に幾何学模様に伸ばされた無数の梁は、陽光が差し込む昼間ならば美の一種として認知されただろう。
あるものがなければ……
「カルトの連中、首吊りをしたのかよ……」
ジェイクの言葉に多井中が短く悲鳴を上げた。
無数の梁には何本もの先端を輪に結んだ縄が括りつけられており、窓が閉じており、風など吹き込むはずがないのにぶらぶらと揺れているのだ。

「か、帰りましょう……」
　多井中が震える唇で情けない言葉を口にした。
「ビビっているのか、多井中」
　ジェイクは、自身もこの光景に動揺していたことを棚に上げて多井中を情けないと思った。
　多井中は動画配信者に憧れており、ジェイクのアルバイト募集に応募してきたのだ。
　後進に威光を示すことも優れたアーティストの務めだと思っているジェイクは、多井中を採用したのだが、こんな絵になる光景を前にして「帰りましょう」では話にならないだろう。
「おいおい、多井中。
　お前、俺のような動画配信者になりたいんだろう？
　だったら、このロープに首を通してみるとか提案しないと駄目だろ？」
　思い付きを口にしてから、ジェイクは己の発想に満足した。
　かつての集団自殺の痕跡である縄に首を通すＤＣ。
　中々に不謹慎で衆目を集めそうな光景ではないか。
「む、むむむむむりですよ……」
　だが、情けない多井中は首を振りながら声を震わせている。
　お漏らしでもしないかな、とジェイクは多井中の股間にカメラを向けた。
「ジェイクさんがこう言っているんだし、やろうぜ。
　バイト代のた、ためだし」
　多井中の臆病風が移ったのか、佐治木まで声が震えている。
「佐治木はよく分かっているじゃないか。
　じゃあ、佐治木は適当な台を探してくれるかな」
「は、はい……」
　佐治木が震えながらも祈りの間の中に入ろうとする。
「駄目だよ、佐治木！」
　多井中が佐治木の手を掴んだ。
「見えてないの！？
　ロープにぶら下がっている人たち、今もぶらぶら揺れているじゃないか！」
　多井中の言葉に、ジェイクはおいおい、と思った。
　ジェイクはカメラ越しに祈りの間を見ているが、ぶら下がっているのはロープだけで人なんかぶら下がっているはずがない。
「……嘘だろ？」
　佐治木がべたんと音を立てて祈りの間の床にへたり込んだ。
「俺にも見える……
　さっきまで見えなかったのに……」
　佐治木が床に尻をついたまま後ずさりをした。
「さっきまで見えなかったのに、ロープに人がぶら下がってるよ！」
　佐治木がホラー映画のような悲鳴を上げた。
　ジェイクはカメラでぐるりと祈りの間を撮影してみた。

だが、梁にぶら下がっているのはロープだけで、人など見えやしない。
本当に人がぶら下がっているのならば、動画の視聴率が増えただろうに、と面白くない気分になる。
多井中と佐治木の怯えっぷりはまあまあ笑えるのだが、所詮は素人。
ジェイクの求める水準に達していないのだ。
「お前らさ、心霊廃墟だからって、そういうベタな演技はよくないな」
「ジェイクさんは見えないんですか！」
佐治木が今にも張り裂けそうな様子で祈りの間を指さす。
「見えるわけないだろ、カメラには何も映ってないんだからな」
ジェイクはもう一度祈りの間にカメラを向けた。
やはり、揺れているだけの縄しか見えない。
カメラを構え続けて肩が凝ったので、ジェイクはいったんカメラを下ろして肩を回した。
ぶらあああ……ぶらあああ……
梁が大きく軋んだ。
ジェイクは祈りの間を見て、絶句した。
無数の縄に人がぶら下がっているのだ。
顔を真っ黒く塗っている人たちが左右に揺れているのだ。
ジェイクは慌ててカメラを構えた。
だが、カメラには揺れる縄しか映っていない。
「何で映らないんだよ、クソが！」
ジェイクは苛立ちから床に唾を吐いた。
こんな視聴率間違いなしの光景がカメラに映らないだなんて、世の中は間違っている。
ジェイクはどうにかこの光景を記録できないかと、スマートフォンを取り出し撮影してみた。
だが、スマートフォンにも揺れる人影は写らず、縄だけが揺れている。
「おい、お前ら」
ジェイクはすっかり怯えた様子の多井中と佐治木を見下ろした。
「あの中に行ってションベンしてこい」
ジェイクの言葉に多井中が悲鳴を上げ、佐治木が首を振った。
「お前ら、俺のアルバイトだろ。
だったら、言うとおりにしろ。
ここまで来て、動画のネタ一つ提供できないならどうなるか分かっているのか？」
ジェイクが床を踏み鳴らすと、佐治木が「無理ですよ」と泣きそうな顔をした。
一方の多井中は恐怖が振り切れたのか、何も言わずに立ち上がった。
「下品な男だな」
多井中の口からジェイクを侮辱するしわがれた声が飛び出した。
「なんだと、クソガキ！」
ジェイクは反射的に多井中の顔めがけて手を振り下ろそうとした。
だが、ジェイクの手は多井中の顔に届かなかった。
多井中の顔とジェイクの手の間にゴムボールが挟まっているかのような圧力が加わり、

届かないのだ。
「下品な男だな。
　我らの神聖な墓所において、ＤＣに放尿をさせようとは」
　多井中が白目をむいて、ケタケタと笑いだした。
「多井中、どうしたんだよ、多井中！」
　佐治木が多井中の身体に縋りつく。
「そう怯えずともよい。
　ちょっと身体を借りているだけ故、用が済めばお前たちは無事に帰してやろう」
　多井中が白目をむいたまま、佐治木に笑いかける。
「……お前、誰だよ」
　佐治木の問いかけは、ジェイクの疑問でもあった。
「これはこれは、失礼した」
　多井中が白目をむいたまま、優雅に一礼した。
「私は冥堂観月（みょうどう　かんげつ）。
　この墓所の守り人よ」

　ジェイクは頭が真っ白になった。
　ジェイクは死後の世界など信じていない。
　死霊だとか祟りだとか、そういうものを信じていたのならば、そもそもこの廃墟に深夜に侵入しようだなどとは思わない。
　視聴率が増える絵が撮影できればそれでいい、と思っていただけで、本気で心霊現象に遭遇できるとは思いもしなかったのだ。
「そこの坊や。
　お前たちは何をしにここへ来たのかな」
　多井中、いや、冥堂観月が佐治木に問いかける。
「俺は……」
「お前は口を開くな。
　その下品な性根の臭さが汚らわしい」
　口を開こうとしたジェイクを冥堂観月が叱責した。
　不思議なことに、ジェイクは声を出すことができなくなった。
　腹に力を入れても蚊の鳴くような声も出せないのだ。
「俺、いや、私たちは、ここに動画撮影に来ました」
　佐治木が震える声で冥堂観月に話し始めた。
「ジェイクさんの新作動画の撮影ということで、アルバイト代を貰って、この廃墟に忍び込んで撮影に出演するって話で……それで……」
「そう怯えずともよい」
　冥堂観月が佐治木の頭を撫でた。
「子どもとは時に突飛なことをするもの。
　悪いことだと気がつき、反省しているのならば、私は責めはしない。

だが」
冥堂観月がジェイクを見つめた。
「子どもを唆して悪さをさせる大人には仕置きが必要よな。
とはいえ、一方的に罰を与えるのも悪しき行い。
許す。
お前の言い分を述べてみよ」
「お、俺は」
冥堂観月の言葉にジェイクは再び声を出せるようになった。
「俺は、偉大なアーティストだ。
アートの前にはあらゆる行為が許されるんだ。
仕置きされるようなことなんか、何もない」
「愚か者め」
ジェイクの弁明を冥堂観月が切って捨てた。
「お前の素行を見抜かせてもらったが、劣悪極まりないな。
愚行で衆目を集めること自体が愚であるが、お前は、己の顔を出さずに他人を食い物にして衆目だけは得ている。
一方的な寄生をアートとは、三流芸人にも劣る下種が」
冥堂観月の言葉はジェイクの本質を貫くものであった。
だからこそ、ジェイクのプライドは酷く傷つき、全身を怒りに震わせた。
だが、ジェイクの怒りを発散させようにも、ジェイクの身体は硬直したまま動こうとはしない。
「ふむふむ。
それほどまでに視聴率が欲しいのか。
いつの世も下らぬ人間ほど衆目を集めたがるものよ。
ならば」
冥堂観月がジェイクの手からカメラを取り上げた。
返せよ、と怒鳴りつけたかったのに、ジェイクの口は動きもしない。
「佐治木くん。
君はこのカメラを使えるかな」
「は……はい」
冥堂観月の問いかけに、佐治木が頷いた。
「では、お前はこの下種を撮影しなさい。
最後まで務めたら、多井中くんと一緒に帰してやろう」
冥堂観月の言葉に、佐治木が何度も何度も大きく頷いた。
「では、下種め。
お前の大好きな視聴率を集めさせてやろう」
冥堂観月がにやりと笑った。
「お前の身体でな。
まずは、三流芸人の基本、全裸となるがよい」

　ジェイクは屈辱に顔を真っ赤にしていた。
　だが、冥堂観月の言葉にジェイクの身体は従ってしまう。
　ジェイクの身体は服を脱ぎ始めてしまったのだ。
　シャツを脱ぎ、ダメージジーンズを脱ぎ、贅肉は見当たらないが筋肉もさほどないスリム体型の赤のブリーフ一枚の姿にさせられてしまう。
　ジェイクのブリーフはもっこりが大きく目立つものであった。
　ジェイクの女たちが夢中になる自慢のチンポなのだが、だからこそ、得体の知れないモノに好きにされることは屈辱だったのだが、ジェイクの身体は冥堂観月に逆らえない。
　ジェイクの手が赤のブリーフにかかる。
　ゆっくりと引き下ろされ、ジェイクの自慢のチンポが露わになっていく。
　ジェイクのチンポは立派なものであった。
　陰茎は太く長く、亀頭はずる向けで真っ黒く使い込まれている様子を示している。
　金玉もどっしりとしており、女たちを満足させるジェイクの性欲の強さを如実に示していた。
「なるほど。
　これが女たちを狂わせる元凶か」
　冥堂観月がため息をついた。
「女たちも哀れなものよ。
　少し考えれば、お前のような下種が人気者になれるはずなどないのに、動画配信者という肩書を信じ、己の目で作品を見ることもなく、有名人に近づけると信じて投資をするのだからな」
「俺の才能に文句があるのか、クソが」
　冥堂観月の言葉にジェイクは反論した。
　女たちはジェイクの才能に惚れ込んでいるのだ。
　ならば、身も心も金も捧げるのが当然のことだろう。
　それを、こんな得体のしれないモノに、揶揄される筋合いなどないのだ。
「ふうむ。
　愚かさ極まれり、だな」
　冥堂観月が呆れた様子で首を振った。
「では、佐治木くん。
　中継を開始しよう」
「中継だと！」
　冥堂観月の言葉にジェイクは動揺した。
　カメラで撮影されるだけならばまだ、カメラを回収すればなかったことにできる。
　多井中と佐治木については口止めをすればいいだろう、と甘く見ていたのだが、まさか、中継されてしまうとは思わなかったのだ。
「何を驚く。
　生放送というものも知らないのか。
　私の生前には既にあったぞ」

「おい、止めろ！」
　ジェイクは必死に口だけを動かして冥堂観月を止めようとする。
　だが、冥堂観月は多井中のスマートフォンを勝手に操作し、ジェイクが愛用している動画配信サイトを開く。
　ジェイクのページに、全裸のジェイクが映し出されている。
「おいおい、今度のジェイクくんは露出狂ドキュメントかよ」
「チンポのでかい変態だよなあ」
「毎度思うけど、ジェイクくん、人生をどぶに捨てるやつを見つける才能凄すぎ」
　ジェイクの全裸動画にコメントが集まりだす。
「では、タイトルコールだ」
　冥堂観月の言葉に、ジェイクは必死に抵抗しようとした。
　だが、身体はブルブルと震えるだけで、抵抗らしい抵抗はできない。
「エリート配信者ジェイクの！
　突撃！　心霊廃墟！」
　ジェイクは全裸で間抜けな言葉を言わされてしまった。
　現実での評価はともかく、ジェイクの自意識では、ジェイクはエリート動画配信者であり先鋭的なアーティストだ。
　その己が全裸を披露するなど、築き上げてきたブランドイメージが壊されてしまう。
　だというのに、ジェイクは冥堂観月の言葉に逆らえない。
　ジェイクを撮影している佐治木の手からカメラを払いのけることもできないのだ。
「ちょ、この声、ジェイクくんじゃね？」
「え？　ジェイクくん、視聴率欲しさにとうとう全裸芸披露？」
「ジェイクくんの人生投げ捨て動画に出演できる馬鹿もとうとう底をついたか」
　わざわざコメント読み上げ機能まで起動したのか、多井中のスマートフォンからジェイクを嘲笑うコメントが次々と読み上げられる。
　己のブランドイメージが踏みにじられる屈辱にジェイクは歯をカチカチと震わせる。
「本日のジェイクは、なんと生放送！
　しかも本人出演！
　皆が知りたいジェイクくんの秘密を、この心霊廃墟で丸裸にしちゃうからな！」
　ジェイクの口から、ジェイクの本心とは真逆の陽気な言葉が飛び出す。
　ジェイクはアーティストなのだ。
　アーティストとはアートを生み出すものであって、アートに、いや、晒し者になってはならない尊い存在なのだ。
　だというのに、ジェイクは現在進行形で晒し者にされている。
　下着一枚着ることも許されずに、生まれたままの姿を配信させられているのだ。
「こんばんは、アシスタントの冥堂観月です」
　冥堂観月がしわがれた声で話し始めた。
「今回はジェイクくんの視聴率アップのために力を貸すことになりました。
　途中、何度か声が入りますが、どうか、お気になさらぬように。
　では早速ですが、コメントでジェイクくんへの質問を募集します。

どんなに恥ずかしい質問、答えにくい質問でも、ジェイクくんは本当のことを答えますよ」
冥堂観月の言葉にジェイクは恐ろしくなった。
冥堂観月に得体の知れない力があり、ジェイクはそれに逆らえない。
そんな冥堂観月が、「ジェイクは本当のことを答える」と明言したのだ。
つまり、これから来る質問に、ジェイクは嘘やごまかしを口にすることができないということか。
ネットの住民たちが、獲物に対してどれほどまでに嗜虐心を見せるかは、ジェイク自身がよく知っている。
これまでのジェイクは彼らを煽る側だったので、彼らの狂暴性を危険視していなかったが、己にその矛先が向けられるとなると、死んだ方がマシだとさえ思えてくる。
「ジェイクくんの本名を教えろ下さい」
「俺の本名は井上富男（いのうえ　とみお）です。
ダサい名前だから、呼ばないでくれよ」
言いたくなかったことなのに、ジェイクの口からは陽気な声で秘密が暴露されてしまう。
「へええ、富男くんかー。
ジェイクとどっこいどっこいじゃね？」
「全裸チンチン状態で名前のダサさとか些細な問題だよな」
「まあ、今更富男くんでも紛らわしいし、ジェイクくんと呼んでやろうぜ」
コメントには本名を暴露させられたジェイクへの同情など欠片も見られない。
その事実に、ジェイクは泣きたくなった。
「ジェイクくんはどうして全裸なんですか？」
「視聴率が欲しいからです！」
ジェイクの口から嘘が飛び出した。
視聴率が欲しいのは事実だが、ジェイクは笑い者にされたいわけではないのだ。
「ジェイクくん、マジでクズだわ」
「全裸で視聴率下さいとか、ネットファンタジーじゃなかったのか」
「チンポがでかい分、おつむが軽いんじゃね」
「ジェイクくんのおつむが軽いのは、今更だよな」
多井中のスマートフォンからジェイクへの嘲りが次々に読み上げられる。
「ジェイクくん、腰振りダンスでチンポぶらぶらさせて」
「喜んで！」
ジェイクの顔は勝手に笑みを浮かべ、ジェイクの身体は勝手に腰に手を当てて、腰を左右に揺らし始める。
ジェイクの腰の動きに合わせてジェイクのチンポがぶるんぶるんと左右に揺れる。
こんな醜態が配信されているのかと思うと、ジェイクは死んでしまいたくなる。
先鋭的アーティストであるジェイクは現在、社会的に殺されつつあるのだ、と思うと情けなさで涙が出てくる。
「おいおい、ジェイクくん。
泣きながら笑うとか器用な真似をするよな」
「これまでの動画より段違いで面白いぞ」

「友達にも教えてやらなくちゃ」
　偉大なるアーティストが社会的に殺されつつあるというのに、コメントは盛り上がり続ける。
　動画は好評価で溢れ、視聴者数も増える一方だ。
　見られている。見られてしまっている。
　ジェイクの無様な姿が拡散され続けている。
　恐ろしさと情けなさでジェイクは逃げ出したいのに、ジェイクの身体は情けない腰振りダンスを続けてしまう。
「ジェイクくん、ぶっちゃけた話、こんな動画で生活できてるの？」
「俺は才能あるアーティストだから、パトロンには困っていないんだよ。
　女たちが貢いでくれるからな」
　下らない質問にまで口が勝手にペラペラと余計な返答をしてしまう。
「うっわ、最低だな」
「要するにヒモニートのお遊びか」
「こんなんでも女がつくとか世の中不公平だよな」
「でもまあ、こんな動画が流れたら女にも愛想をつかされるだろ」
「だよな。可哀そうなジェイクくん」
　動画のコメントには、ジェイクへのやっかみが溢れていく。
「ていうか、ジェイクくん、パトロンじゃなくて竿売って金貰ってるだけだろ？」
「それのどこが悪いんだよ。
　女たちは俺のチンポに群がってくるから、恵んでやってるんだよ」
　ジェイクに貢いでいる女たちには聞かせられない言葉までジェイクの口は勝手にしゃべってしまう。
「うっわ、クズだな、クズ」
「動画の質から分かっていたけど、清々しいまでのクズだな」
「これでアーティスト気取りだから救いようがないよな」
「腰振りチンポでアーティストとか笑わせてくれるよな」
「救いようのない一発芸だけどな」
　読み上げられるコメントには、ジェイクへの親しみやリスペクトがまるでない。
　こんな苦境に立たされているというのに、誰もジェイクに同情しようとしない。
　もっとも、それは無理のない話だ。
　ジェイクは投稿してきた動画は、良識よりもその場限りの面白さを優先する人間を対象にした不謹慎なものばかりだ。
　そうした不謹慎な動画を喜ぶ人間が、全裸腰振りチンポぶらぶらジェイクを喜ばないわけがない。
　ジェイク自身だって、そんな間抜けを見かけたのなら容赦なく笑うか、自分の動画で利用できないかと考えるだろう。
　とどのつまり、今、こうしてジェイクが笑い者として消費されているのは、そういう視聴者相手に動画を配信し続けてきたジェイクの自業自得なのだ。
　ちくしょう……ちくしょう……

ジェイクは笑顔を浮かべて腰を振り、チンポを振りながら心の中で己の不幸を嘆く。
秘密のヴェールに包まれて凡人どもの好奇心を一身に集めるべきアーティストとしての自尊心を踏みにじられることへの苦痛に心がズキズキと痛む。
「ところで、ジェイクくんは週何回オナニーしているの？」
だが、ジェイクの心痛など関係ないとばかりに心ない質問がまだまだ投げつけられる。
「女とのセックスで使うのに、無駄撃ちするわけないだろ、常考」
ジェイクは言いたくもないことを勝手に告げる口を引き裂きたくなる。
冥堂観月の魔性から逃れられない以上、この中継を何とかするにはジェイクのカメラで撮影をしている佐治木が叛意を見せるしかないのだが、佐治木はジェイクを裏切って冥堂観月の言葉に従っている。

誰にでも尻尾を振るクソ犬が！
お前の雇い主は誰だか分かっているのか、このクソ雑魚！

ジェイクは心の中で冥堂観月の言いなりになっている佐治木を罵る。
たかだが 3000 円のアルバイト料で魔性に逆らうだけの根性を見せろ、というのは暴利にもほどがあるだろうに、ジェイクだけは己の図々しさに気がつかない。
「じゃあ、女とは何回セックスしているのかな？」
「日替わりで週五回だよ」
「じゃあ、どの女が一番か教えて？」
ジェイクのプライベートと女たちとの関係をぶち壊しにするコメントを投げかけられ、ジェイクは怒りではらわたが煮えたぎりそうになった。
ジェイクが女たちとの関係を破綻させていないのは、ジェイクに引っかかった女がジェイクを将来ビッグな動画配信者になると信じ込んでいることもあるのだが、ジェイクが他の女の話をしないことにある。
配慮からではない。
ジェイクにとって女とは性欲と金銭欲を満たしてくれる相手だけであり、下品な表現をするのならば獲物でしかない。
そうではない女性はジェイクにとっては、マネキンか彫刻で、見た目が綺麗でも獲物としては成立しないのだ。
どこの財布から出ようと 10000 円は 10000 円というのがジェイクの持論だ。
そして、女たちもジェイクの関心を買うには金と身体を差し出すのが一番だと分かっている。
そういうお互いのニーズの一致によって、ジェイクと女たちとの関係は危ういバランスの上に成り立っている。
けれど、クズでしかないジェイクでも、女たちを露骨に比べたら悲惨なことになると想像できるぐらいの思考力はある。
だから、ジェイクはその質問を誤魔化そうとした。
けれど、ジェイクの思考とは裏腹にジェイクの口は真実を口にしてしまう。
「股の具合なら明海で、金払いがいいのは喜代子、フェラチオが上手なのは祥子で、いつ行

っても金をくれる暇人が織香だな。
　まあ、一番はいない。
　どいつもこいつも、取り柄があるだけで最高の女ってわけじゃないからな」
　ジェイクの口から、ジェイクと女たちとの関係を破綻させる言葉が飛び出した。
　こんな動画が女たちの目に留まってしまったら、ろくな結末を迎えられないだろうと想像がつき、ジェイクは冷や汗を流し始めた。
　けれど、ジェイクの顔は笑みを浮かべたままで、身体は腰振りチンポぶらぶらダンスを踊り続けている。
「うっわー、ジェイクくんさいてー」
「ジェイクくん、根性悪いな」
「ていうか、こんな性悪とセックスするぐらい男に飢えているのかよ、ジェイクガールズは」
「チンポのでかさで得をしている感じじゃね？」
「ジェイクくん、チンポしか取り柄がないクズだからな」
　動画閲覧者のコメントがジェイクの傷ついたプライドに塩を刷り込んでいく。
　こんなことを続けられたら、動画配信者としての経歴だけではなく、人間としての経歴まで終わってしまう。
　ジェイクは許してほしくて笑みを浮かべたまま、潤んだ目で冥堂観月を見つめた。
「皆の者。
　ジェイクくんの無様な姿をそろそろ終わりにしたいかな？」
　冥堂観月の言葉に、ジェイクは希望を見出した。
　許されるのだ、とジェイクは根拠もなく確信した。
　この苦境を脱したのならば、まずは中継を止め、それから裏切り者の佐治木と化け物に憑りつかれた根性なしの多井中をぶん殴り、それから、しばらく姿を隠してほとぼりが冷めるのを待とう。
　ジェイクには輝かしい才能があるのだ。
　その才能をこんなくだらない失態で浪費していいはずがないのだ。
「このジェイクくんは今回も悪事を働いている。
　ＤＣを唆して深夜に外出させていることに加えて、ドアの窓ガラスを割ることで器物損壊と建造物への不法侵入をしている。
　こんな悪いジェイクくんの無様な姿、本当にそろそろ終わりにしていいかな」
　終わりにしていいに決まっているだろう。
　ジェイクは自分が視聴者の立場だったのならば考えもしないことを考えた。
　ジェイクは十分に辱められた。もう十分だろう。
　だが、ジェイクは忘れていた。
　ジェイクの動画をこのんで視聴する者たちが、ジェイクへの同情心を抱いたり、この程度で愉しみを終わらせるような善良な人間のはずがないのだ。
「悪い奴だな、ジェイクくん。
　お仕置きが必要だと思う」
「そうだな。罰はもっと苛烈にしないとな」
「徹底的に辱めて悪いことをできないようにさせようぜ」

「お尻ぺんぺんは基本だろ？」
「ジェイクくんのラストムービーに相応しいどぎつい罰を与えちゃってください」
　視聴者からのコメントはジェイクの希望に反して罰の継続を、ジェイクの苦境を愉しみたいという非人道的なものであった。
　嘘だろ……冗談だよな……
　ジェイクは心の中で震えるが、ジェイクの顔は笑顔を浮かべたままであり、ジェイクの身体は無様な腰振りチンポぶらぶらダンスを続けている。
「でかいチンポで調子に乗ってきた人生を後悔させてやってください」
「女を食い物にしてきた報いを与えてやってください」
「もういっそのこと、人間として生まれてきたことを後悔させてやってください」
「ジェイクくんの不幸でご飯が美味しいです！」
　読み上げられる視聴者からのコメントがジェイクの心を追い詰めていく。
「おやおや、ジェイクくんは人気者だな」
　冥堂観月がＤＣらしからぬ邪悪な笑みを浮かべている。
「皆の者がジェイクくんの無様な姿を望んでいる。
　皆の者がジェイクくんの滑稽な姿を望んでいる。
　皆の者がジェイクくんの罰に喘ぐ姿を望んでいる。
　どんな生き方をすれば、ここまで心ない者を集められるのだろうなあ」
　冥堂観月がジェイクの尻をピシャリと叩いた。
　ジェイクは冥堂観月を殴り返したいのに、身体は腰振りチンポぶらぶらダンスを止められない。
「まあ、これもまた自業自得。
　深夜にＤＣを連れて不法侵入をするような青少年の教育に悪い者には相応しい罰が必要だろう。
　いや、そもそも、他人の醜態や不幸を飯のタネにして生きてきた醜悪さの報いを今日この場で受けるべきなのだよ」
　冥堂観月がにやりと笑った。
「ジェイクくんには、これから堕落に塗れた人生を後悔させてやろう。
　我々の聖地で下らない動画を撮影しようとした報いをその身体にたっぷりとなあ」
　冥堂観月の言葉にジェイクの心は震えあがった。
　冥堂観月の言葉に動かされたままのジェイクの身体は腰振りチンポぶらぶらダンスを踊り続けており、股間では女を善がらせてきたジェイクのチンポが振り子のように揺れている。
　この魔性にこれから何をされるのか分からず、ただただ、恐ろしさと恥ずかしさに身を震わせ、嵐の海で翻弄される木の葉のように耐えることしかできない、と予感したのだ。

奥付

『ひんしゅく系動画配信者ジェイクの突撃心霊廃墟』のサンプル

初出：2021 年 4 月 27 日
著者：金目

金目の同人活動一覧
【pixiv】
https://www.pixiv.net/member.php?id=22137005

【DLsite がるまに】
https://www.dlsite.com/bl/circle/profile/=/maker_id/RG01002299.html

【ゲイ小説進捗状況呟きアカウント】
https://twitter.com/chigaya_deep